

アナザーワールドを構想しながら、 いまこの世界に戯れるために

小川 さやか

〔文化人類学〕

私はタンザニアの都市零細商人の商慣行や商実践、商関係について研究している。最近では、アフリカ諸国と中国とのコピー商品や偽物の取引に関心を持っている。私の研究対象は一般的に「インフォーマル経済」と呼ばれるものだが、経済学や開発研究ではなく人類学者を名乗って研究している。人類学の醍醐味は、この世界に確かに存在する、私たちのものとは異なる文化や社会、経済、政治のしくみとそこで生きる人びとのミクロな営みから、私たちがこれ以外にはありえないと思いきや、この世界のしくみや生のあり方を相対化し、オルタナティブな世界・生き方を構想する糸口をみつけることにある。今回の特集では、アナザーワールドを構想し、いまこの世界に戯れるヒントとなる著作を選んでみた。

●トム・ルッツ著『働かない ——「怠けもの」と呼ばれた人たち』（青土社、二〇〇六年）

いつまでたつてもカウチから起き上がってこない息子。著者のルッツは怠惰な息子にとうとうキレた。そして悩んだ。なぜ私は怠けている息子に怒りを感じるのだろうと。怒りの正体を知るために、ルッツは一八世紀から現在までに英米に登場した怠け者たちの肖像・主張と、彼らに対する批判や怠け者表象をめぐる歴史を丹念にたどり、私たちの労働観の両極に位置する勤労主義と怠け者（スラッカー）主義との奇妙にねじれた関係を解き明かした。

分厚い労働文化史を読み終えてわかることは、人間（社会）にとって働くことと怠けることは不可分の価値を構成し、私たちは勤労

主義と怠け者主義のいずれの側に立つても満たされない思いを抱え、つねに他方を希求するということだ。

産業革命の幕開け期、「時は金なり」と唱えて現在の勤労主義を形作ったベンジャミン・フランクリンは、空気浴にいそしむ快樂主義者だった。他方、人間は「怠惰な動物」であり、自己修養や利益追求に邁進することこそおかしいと説いたサミュエル・ジョンソンは、猛烈な勢いで執筆活動をこなした多忙な人物であった。かの有名なカール・マルクスの娘婿ポール・ラファアルグは、『怠ける権利』を上梓し、「個人や社会のあらゆる悲惨さは、労働への情熱から生まれる」と結論づけた。アイドラー、ラウンジャー、ボヘミアン、ソーンタラー、トランプ、フラヌール、ビートニク、バム、ヒ

ッピーなど本書に登場する多彩なスラッカーたちは、各時代の勤労主義者の労働哲学を反転させたが、彼らの生き方や彼らが生み出した芸術を消費したのは、勤労主義者でもあったのだ。

いま日本では、ニートやワーキングプアなど「働くこと」「働かないこと」をめぐる硬直した言論が飛び交っている。本書が描く実在・架空の怠け者たちは、そのような硬直した労働観に対して——訳者の小澤英実氏も述べるように——、私たちに優越感や軽蔑や慰めや励ましといった感情を呼び起こしながら、私たちの生き方を維持・破壊・肯定・自問させる機能を果たすトリックスターとして立ち現われるだろう。

●ルイス・ハイド著『トリックスターの系譜』（法政大学出版局、二〇〇五年）

トリックスターとは世界各地の民話や神話、文学などに登場する文化的英雄であり、いたずら者である。東アフリカでは、野ウサギやクモなどがその代表だ。体は小さく力も弱い、頭の良い彼らは、狡猾な知恵で自分よりも力の強い相手をやりこめる。必ずしも彼ら

は道徳的に善ではないし、また常に企みが成功するわけでもない。だが、魅力的な者たちだ。私は、本書の次の一節を読んで以来、頭のなかに「おしゃべりな猿」を飼うことにしている。

「……われわれの生き方がわれわれに閉塞感を与えるとき、例えば見知らぬ人たちが織った織物のようで、元気を与えるよりは意気消沈させる模様に感じられるとき、そういうとき、もしもわれわれが幸運であれば、精神に潜む猿がわれわれを無気力から目覚めさせるために悪戯っぽいお喋りを始めるであろう。どうにも物わりの悪い人々のためには、その猿はまずお決まりのトロープ・ア・ドープ「騙しの修辞」から始めて、規範をあまりに生真面目に受けとめれば、いわば自己拷問につながることを明らかにするであろう」（四二四ページ）。

社会はその内部に集団を分節化する内的な境界をもち、聖と俗、清と濁、男と女、若と老、生と死といった多様な区分の上に成り立っている。トリックスターは一般的にこれらの境界・区分を超え出ること、社会の規範や秩序を攪乱させる者とみなされている。ハ

イドはこれに修正を加えて、彼らは既存の境界を超えるだけでなく、隠されていた境界を表出させたり、消したり、動かしたりする働きもすると指摘する。彼は、トリックスターを「関節Ⅱ業師」と名づけ、その破壊的想像力とそれに基づく技芸を記述する。すなわち、トリックスターは、私たちがみずから再生産している文化や社会をあたかも永久不変のものとし、みずからの世界を形づくる作業に参与する／できることを忘れ、そう

してつくられた文化に苦しめられるとき、古い境界を消し去ったり、窮屈な区分を緩めて接合部に油を塗ったり、そこに開口部をつくり「規則」が禁止を命じていた場所に交渉を開始させたりして、文化の根本的な形状を変化させるのだ。だが、私たちの社会ではトリックスターが棲む余地がますます縮小しつつある。たとえば、ハイドはレヴィⅡストロースを引きつつ、根本的な変化の脅威を与える者たちに対する処遇の異なる二つの社会を例示する。ひとつは、危険な力をもつ個人を飲み込んで、その力を利益に変えようとする「食人を実行する社会」。もうひとつは、危険な個人を孤立させたり特別な

監獄へと閉じ込めようとする「人の嘔吐を実行する社会」。しかし、関節Ⅱ業師が破壊的な力を行使するためには、そのいずれの運命も逃れて、内でも外でもない敷居の上に留まれる隙間、世界の余白、猥雑な空間性が必要となる。

私は、この余白・隙間、猥雑な空間性を創造する鍵こそ、インフォーマルな領域を問うことにあると考えている。

●酒井隆史著『通天閣——新・日本資本主義発達史』（青土社、二〇一一年）

通天閣のふもとから描きだす都市の一大叙事詩。アナキスト詩人の小野十三郎から始まり、一九〇三年の第五回内国勸業博覧会に際して裏仕事を担った小林佐兵衛、「将棋の王様」阪田三吉、織田作之助と『貸間あり』の映画監督川島雄三、借家人同盟を率いた無政府主義者たちに飛田遊郭の娼婦たち——著者のことばでいえば、怪しげな投機家、人道主義者の極道者、悪評だらけの企業家、単独決起する車夫、わがもの顔でのし歩く博徒、警察に追われるアナキスト、野宿する私娼たち、ハッタリめいた運動家、あるいは嫌われ者

のジャーナリスト——本書は、大阪ディープサウスの空間性を創りだしてきた人びとの生き様から、日本の社会思想の流れを独自の視座で汲みだした大作である。

私が関心を寄せている「インフォーマル性」の豊かさはこのようにも描きだせるのだと感じた。インフォーマル性は、違法性とは異なる。インフォーマル経済の研究者们は、違法性illegalと道義的な違法性illicit／合法性licitとの関係に関心を持ってきた。licitは法的には禁止されているが、社会的には許されている行為を意味する。だが法的な違法性とは異なり、どんな行為が何故どこまで許されるのかはよくわからない。なぜなら、この道義性とは、本書で描き出されているように、ばらばらの方向をむいた勢力がひしめきあい、互いの行為に整合的な意味を読み込むことを拒みながら、人間臭い駆け引き／調整をすることを通じて事後的に発見される何かでしかないからだ。それでもインフォーマルな領域はいまある世界に身を投じながら、その世界の構成に戯れる術に満ち溢れている。（おがわ さやか／立命館大学准教授）